

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月28日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520708

研究課題名（和文）イルハン国の交通システム

研究課題名（英文）The Traffic System of the Ilkhanids

研究代表者

北川 誠一（KITAGAWA SEIICHI）

東北大学・大学院国際文化研究科・教授

研究者番号：50001813

研究成果の概要（和文）：

モンゴル帝国の分国であるイルハン国の君主ウルジェイトゥは、国都をタブリーズからスルターニヤに遷すとともに、都と地方を結ぶ5本の公道、所謂シャーラーフを整備した。本研究は、これら5公道の機能を国事に関わる使者の旅行、国際交易商品の運送、遊牧民である支配者一族の移動経路、メッカ巡礼路等の諸視点から解明した。

研究成果の概要（英文）：

Uljaitu, the lord of the Mongol-Ilkhanid state in Iran moved his capital from Tabriz to Sultaniya and organized five highways or *shahrāhs*. This study analyzed the functions of these highways from the viewpoints of state affairs, transportation of merchandises of international trade, the way of hajj pilgrimages and seasonal movement of nomad rulers.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：

イルハン国、シャーラーフ、ヤーム、キャラヴァンサライ、リバート、オールド、ハーンガーフ、イルチ

1. 研究開始当初の背景

遊牧国家は移動と情報に戦略的基礎をおいている。本田実信は、「イルハンの冬営地・夏営地」、「スルターニヤの建設」（ともに本田実信『モンゴル時代史研究』東京大学出版

会、1991年所収）を著し、歴代イルハンの宿営地の所在地を考証するとともに重要な国事はことごとく移動の途で行われていたことを解明し、またウルジェイトゥが建設した新首都スルターニヤを中心にシャーラーフ

と称される公道が設置され、首都と地方を結ぶとともに、国際商業ルートに接続していることを主張した。申請者は本計画に先立って「イルハン国北道考」を公刊し、シャーラーフ中、ザンジャー、アルダビール、ティフリース、ダルバンドを結ぶ部分について、各宿駅、橋梁、および関連する施設の位置の特定を試みた。シャーラーフ北街道（北王道）の周囲にはハンや王侯貴族の遊牧地や宮殿、また宗教施設が配置され、広域首都圏を形成していた可能性が判明した。

宿駅の位置と街道経路に関しては、イスラーム帝国の交通史の観点から、シュワルツ、リーストレインジ、マナンディヤン、クラウルスキー等が基礎的研究を行ってきた。時代的関心を13-14世紀に設定した上で、経路、宿駅や橋梁などの位置を考証するような基礎的作業は、北王道に留まらず全シャーラーフについて行わなければならないが、さらに視野を拡大してシャーラーフ沿線の遊牧地、宮殿、宗教施設を調査し、本田実信が解明した遊牧民であるハンの移動ルート、情報の経路である街道、さらに国際交易のルートの相互の関係を明らかにし、イルハン国の政治史をより地政学的観点から見直す必要を痛感するに至った。また14世紀にはこのルートにそってイスラーム関連の施設が中央政府高官や地方王朝の君公によって多数建設あるいは再建された事実にも注目しなければならない。

その際重要であるのは、本田実信が1972, 1974, 1976年に実施した「イラン中世史跡調査」資料である。申請者も参加したこの調査はシャーラーフのほぼ全体と重なる地域を踏査し、多数の写真を撮るとともに、地図上に踏査記録を残した。歴史的文献上の知見に加えて、踏査記録・写真を利用すれば、13-14世紀イランの交通システム解明に多く

の発見があると思われる。

2. 研究の目的

この研究は、地政学的観点からモンゴル史を再解釈するために、その分国であるイルハン国に存在したとされる幹線道路（シャーラーフ）の経路と宿駅の位置を確定した上で、イルハン国宮廷の移動経路、国際交通路、ハッジ巡礼路等と対比し、農耕地域に成立した遊牧民王朝における交通と移動のメカニズム全体を把握することを目標にしている。

3. 研究の方法

(1) 文献学的歴史地理研究、実地調査の資料を利用する歴史地理研究の二つの方法論を利用し、最後に歴史学の手法によって統合した。

(2) 農耕地域に成立した遊牧国家であるイルハン国の支配機構の地理的移動という観点から分析した。

(3) モンゴル人支配期西アジアの交通網と国際商業の隆盛やイスラーム神秘主義の流布との関係を、交通網に沿って展開した施設の面から解明した。

(4) 手順

申請者がザンジャーからティフリース・ダルバンドまでの部分について「イルハン国北道考」(『史朋』39号)で行ったように、イルハン国末期の首都でシャーラーフの起点であるスルターニヤから各終点に至る全シャーラーフ宿駅について、駅そのものと関連の施設の施設との位置を明らかにするとともに、沿線に展開した種々の施設の建立と運営の状況について明らかにしたが、研究の実際は以下の手順で実施した。

① カズヴィーニーの地理書『心魂の歓喜』「地理編」に見える「シャーラーフ」関連部記事を解釈し、他史料に見える地名、旅行者の実際の移動経路を

対照し、ついで、

- ② シュワルツ、リーストレインジ、マナンディヤン、クラウルスキー等の地名、経路の比定との比較・批判をし、更に
- ③ イラン陸軍省編のイラン地名辞典、アダメッツ編のイラン歴史地名辞典、ハコビヤンのアルメニア地名辞典、イギリス陸軍参謀本部作成地図等の地図などによって現代地名と同定し、また「駅」の名を残す地名を収集した。
- ④ カーラング、タバタバーイー著『アゼルバイジャンの考古学遺跡』、スィルー、クライストとキヤーニー、エルドマン等のキャラヴァンサライ研究などの20世紀に出版された考古学、史跡調査文献等の文献調査、また、
- ⑤ また、僧坊に関するキヤーニー著『イラン僧坊史』、ホフマンのワクフ研究やグロンケの神秘主義教団研究、ヘルマンの文書研究、及びその他の個別の施設や地域に関する研究を承け、駅通と僧坊の関係を考察した。最後に、
- ⑥ 手持ちの実地調査資料中、カラスライド3,600点を整理・デジタル化するとともに、その中の関連する記録、映像との対比を行なった。これが重要であることは、アゼルバイジャン州の「アルマニヤーン」という無名の駅の存在は、カズヴィーニー以外の歴史的文献からは知られないが、イラン陸軍省編纂の地名辞典を待つて、初めて所在地の特定が可能である。しかし、その駅がその場所に存在することの理由は、そこがカラダグ山地からムガン草原に下る遊牧民シャーセヴァン族の移動のルートにあることを実見して、初めて理解できることである。

4. 研究成果

(1) 西アジア歴史地理上の基礎的知見

13-14世紀イルハン国領域の地理特に交通に関するテキスト原文の翻訳と注釈、中世地名と現代地名との対比および位置の同定、踏査済み映像資料との対比を行い、シュヴァルツからクラウルスキーにいたるイラン中世交通・地理史に関する成果をさらに増強する情報が得られた。

(2) イルハン国の駅通制度の解明

モンゴル帝国の駅通制度は、元朝については羽田亨によって解明されたが、イルハン国の駅通制に関する研究はこれまで行われなかった。

① 上記(1)の成果を基礎にイランに残る「駅」の名前を残す地名のデータの一部が得られた。今後データの収集と分析を続ければ、これまでのイルハン国研究に、さらに駅通に関する知見が加えられと思われる。

② また、経済合理性を重視する国際交易経路は、必ずしもシャーラーフの経路と宿泊地を利用しないことが明らかになった。駅通制度と国際交易のキャラヴァンサライとの関係が明らかになったことにより、情報と交易の二面からモンゴル帝国の存続の基盤の一つが示された。

(3) イルハン国の広域首都機能の解明

イルハンの移動経路とシャーラーフ沿線には、王族の滞在地や有力貴族の遊牧地、モンゴル軍人のイクターが設置されたが、また、宮殿、仏教寺院、イスラーム教のモスクが建設された。また、駅通が設置された場合、周囲の現地住民には関連の賦課が義務化された。人口的には少数の移動するイルハン国の遊牧支配者は、圧倒的な人口を持つ農耕定住

地帯の点と線を支配したのではなく、イルハン国はハンの移動を契機に広域的首都圏を形成し、遊牧軍・民だけでなくイラン系現地住民をこの広域首都圏に統合したと考えることができる。

(4) イスラーム教再興隆の原因解明

イルハン国後期には主としてイルハンの宰相であるラシードッディーやタージュッディーン・アリーシャーやロリスターン等の在地地方王朝によって、交通ルートに沿って僧坊（リバート、ザーヴィーイェ、ハーンガーフ）が建設され、宿駅としても利用された。このような宿駅＝僧坊は政治権力から保護され、政治、経済、宗教の経路が一致する状況になり、イスラームの復興を物理的に支えるものとなった。そのような僧坊を拠点にした神秘主義教団が、農耕民と遊牧民双方に盛んに布教をおこなった。今後、これまで過小に評価されていたモンゴル支配によるイスラーム教復興の過程が明らかになることが期待できる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計1件）

北川 誠一（共著）『ユーロピアン・グローバルゼーションと諸文化の変容に関する研究』、東北学院大学、「イルハン国の西王道」、2012、293－312 ページ

〔その他〕

ホームページ等

<http://www2.arena.com.caucasus/caucasia.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北川 誠一 (KITAGAWA SEIICHI)

東北大学・大学院国際文化研究科・教授

研究者番号：50001813

(2) 研究分担者 ()

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：